

口頭発表「命ある動物の力を教育に」

～学習活動に活かす動物飼育をめざして～

高橋信子

1 動物飼育の教育的効果を考えるようになつたきっかけ

子どもたちは生きものが大好きである、これまで学習の場では、カタツムリやダンゴムシ、キンギョ、チョウ、バッタなど自然の中の小さな生き物の観察や飼育を通して「自然のすばらしさ」や「命の尊さ」について指導してきた。

一方、学校で飼われているウサギやチャボについては飼育委員会の児童と担当教師が学校の環境維持活動として取り組むものと理解してきた。そのねらいは「学校生活の充実と向上のために主体的に活動する」というものである。

この飼育舎のウサギやチャボに改めて目を向け、飼育のあり方や意義を考えるようになったのは2003年、教育委員会主催の研修会に参加したことがきっかけであった。そこで、講師をされた獣医師の方から

●温もりが感じられる動物の愛情飼育による教育的効果

<生活科の動物とのふれあい体験と道徳学習を関連付けて（1年生）>

| 活動の意義 | 教科 | 学習活動 |
|-----------|----|--|
| 事前体験 | 生活 | 子どもたちが生活科の学習の中でアサガオを育てたり、カタツムリや昆虫などの小さな生き物を飼ったり、飼育舎のウサギと遊んだりしてきた動物とのふれあい体験 |
| 道徳的価値に気付く | 道徳 | 主題名：動物の気持ちになって 3-（1）自然動植物愛護 ねらい：身近な植物や動物の身になって世話をしようとする心情を育てる。 評価：動植物の身になって世話をすることの大切さに気付くことができたか 資料：『ひっかきウサギ』著者 中川美穂子 童心社／かみしばい どうぶつの飼い方ふれあい方（全6巻） |
| 道徳的実践力の場 | 生活 | ふれあい体験授業（獣医師をゲストティーチャーとして） ・数人のグループになり、学校で飼育しているウサギの抱っこの仕方やふれあい方を教えてもらう ・ウサギやチャボを見ながら、目や耳などの体の特徴や性格について話を聞く ・ウサギの心音を聞かせてもらう。 *尚、事前にゲストティーチャーの獣医師が来校し、保護者向けにウサギやチャボなどの動物と子どもたちとのふれあわせ方について講習を行った。 |
| 休み時間 | | 飼育委員の子どもたちの飼育活動に参加させてもらう。（飼育委員が活動する休み時間に、餌をやったり飼育舎を掃除するために外に出しているウサギと遊んだりする） |

この取り組みの結果、道徳学習の事前、事後に本物のウサギとふれあう活動を計画的に取り入れたことにより、理解する道徳から体験を伴う実感する道徳とすることができた。

また、子どもたちをひきつける動物の魅力は学ぶ意欲を高め、国語の表現力など教科と関連

●アレルギーや動物の感染症をむやみに恐れて子どもから動物を遠ざける傾向に対する危惧

●獣医師の方々の学校動物飼育の支援状況などについてのお話を伺った。これは昆虫等の小動物の飼育を学習することで良しとしてきた事や、アレルギーの問題が指摘されるようになってからハムスターなどの室内飼育に慎重にならざるを得ない現状に一石を投じるものであった。同時に本市では殆どの学校に飼育舎があり、そこでウサギなどの動物が飼われているにもかかわらず、このような情報が入ってくる窗口が無いことにも気づかされた。

私はこの研修会で学んだことを基に、道徳学習「動植物を大切にする心を育む」の一環として、生活科の学習において受け持ちの1年生を飼育舎のウサギやチャボに関わらせる取り組みを試みた。

させることによる様々な教育的効果を生むことも見出すことができた。さらに、学習後も休み時間、飼育委員の上級生に混じって楽しそうにウサギと関わる子どもたちの姿に、全校の子どもたちが継続して関わることができる「学校で動物を飼っているよさ」にも気づいた。また、

獣医師の方々の支援を頂いたことにより、子どもたちの学びを深めたと同時にウサギの扱いに自信が無かった私自身の不安が取り除かれ、安心して子どもたちをウサギにふれさせる事ができた。

2 学校飼育動物の現状

翌年、現任校に赴任した。「命を大切にする心」を育むことをねらいとした学習の一環として、子どもたちを飼育舎の動物と関わらせたいと考えていたが、飼育舎のウサギを見ると名前が無い、数や性別が不明、瘦せて毛が汚れ可愛いと

＜教育活動に活かす飼育舎の動物飼育のイメージ＞

環境を維持する動物飼育
(動物が死なないように世話ををする飼育)

飼育委員会の飼育活動

教育活動に活かす動物飼育 (愛情を伴う飼育)

- 命を大切にする心を育てる
- 他教科の実感を伴う学びを深める
- 生物を見る科学的な目を育てる

- 学年による飼育活動
(飼育委員会と合同も可)

①教師の意識

- 良好な飼育環境を作り、動物をていねいに飼育する。(ていねいに動物と関わる姿勢を子どもに示したり、適切な言葉かけをしたりする。)
- 動物飼育の意義を明確にしを学習の一環として教育活動に位置づける。
- 飼育上の問題に適切なアドバイスをしてもらえる獣医師が地域にいることにより安心して飼育活動に取り組める。

②飼育舎と動物の状況

- 子どもたちと教師にていねいに世話をされていれる。
(毎日の餌やりや掃除が適切に行われ、清潔な環境の中で、動物が健康的に生きている。)
- 様々な学習活動に活かされる。
- 病気の際は獣医師の治療を受ける事ができる。

③動物と関わる子どもの姿

- 動物の身になって世話をしたり、かわいがったりする。喜びと責任を持って世話をする。
- 生きものの命を実感することにより、道徳や理科、国語など各教科の実感を伴う学びが深まる。
- 飼育動物に起こる出来事に対する獣医師の姿勢や適切な対応から命の大切さを実感し科学的な見方が育つ。

全校の子どもたちと教師から

学校のなかまとして大切にされている飼育動物

3 具体的な取り組み

イメージした動物飼育をめざし、次のようなことに取り組んだ。

(1) 飼育状況の改善

飼育委員会担当の教師が子どもたちと一緒に活動しながら、飼育舎の掃除をしやすくする工夫をしたり、一羽一羽のウサギに愛着が持てるよう名前をつけ、担当するウサギを決めたり、うさぎを見にきた子どもたちにも分かるように名前と写真を飼育舎に掲示したりした。その結果、担当教師の受け持ちの子どもたちが手伝いに来たり動物好きの子どもたちがウサギと遊びに来たりするようになり飼育舎がにぎわうよう

はとても言えない姿であった。

「かわいがられて世話をされている」ということが伝わってこないウサギでは「命を大切にする心」を育むことはできない。

このウサギの姿を見たとき、教育活動に生かす動物飼育は「死なないように世話をする」環境維持活動ではなく「かわいがって世話をする」飼育、すなわち「愛情を伴う飼育」が重要だということを感じた。

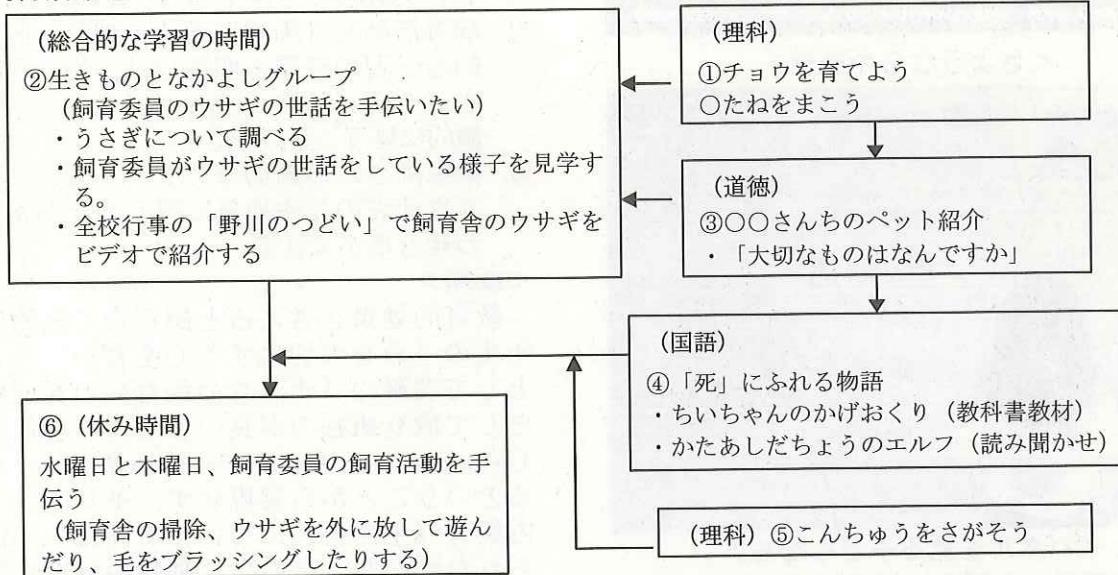
教育活動に活かす動物飼育を教師の意識、飼育舎の状況、動物と関わる子どもの姿に視点を当てて次のようにイメージしてみた。

この姿に、ウサギのことを思って世話をしているという気持ちがあふれていた。譲ることになったブチとシークレットのために、子どもたちは大切にして欲しいというメッセージを書いたり、ウサギを入れる箱をきれいに飾ったりして、当日はお別れのセレモニーをして見送ることができた。

(2)飼育活動を「命を大切にする心を育む」学習の一環として位置づける取り組み

3年生の子どもたちは本能的にと言っていいほど生きものが大好きである。また、知的にも

＜飼育活動を「命を大切にする心を育む学習」の一環として位置づけた取り組み（3年生）＞

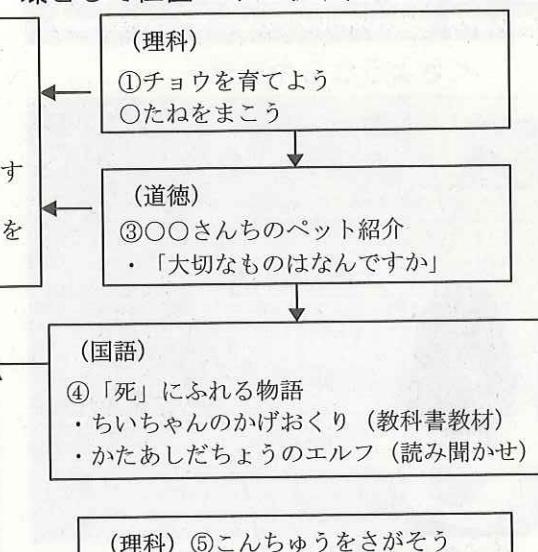


実際の飼育活動をするまでに、理科のチョウの飼育体験、道徳では同じ年頃の子どもがペットをかわいがって育てている様子をビデオで見て「生きものを大切にする」心を育む道徳学習をしたり、国語の教材では死を通して命の尊さを考えたり、教科の中で死や命を考える機会を大事にしてきた。

その学習の積み重ねが、ウサギを上手に避けながらていねいに糞を掃き集めたり、忘れるごとに世話活動に取り組んだりする子どもたちの活動につながっていた。ウサギを追い回したりいたずらをしたりということは全く見られず、教室では指導が難しい子どもも飼育舎では、「先生、餌を食べるところがかわいいよ」といつて、優しい表情でウサギの口元に人参を差し出していた。今会うと「先生、5年生になったら飼育委員会に入るからね」と言っている。中には、家でウサギを飼うようになった子もいる。先日、そのお母さんに会うと「とてもかわいがって忘れずに世話をしています。わんぱくな子ですが、そんな優しさを見ることができ、飼って本当に良かったです」と喜んでいた。3年生でウサギの世話をした子どもたちは4年生になつて、ウサギが死んだとき、お別れの会に進んで参加してきた。いつも元気いっぱいの子供たち

体力的にも責任を持って生きものを育てる事ができるといわれている。この年齢の子どもたちに、3年生の担任としてチョウの飼育で終わらせるのではなく、飼育舎のウサギの飼育にも関わらせられないかと考えた。そこで、学年と飼育委員担当の先生方に取り組みの趣旨を理解して頂き、「命を大切にする心を育む」ことをねらいとした学習の一環として、総合的な学習の時間に飼育委員会のお手伝いとして、飼育活動に取り組めることになった。

＜飼育活動を「命を大切にする心を育む学習」の一環として位置づけた取り組み（3年生）＞



だが、この時は一言も声を出ことなく、静かに亡骸を撫でていた。ウサギには昆虫と違った命の存在感あった。

この取り組みを通して、学校で飼われている動物の飼育活動は各教科の学習と関連させることによって「命を大切にする心」を効果的に育むことができる体験となることを実感した。

(3)獣医師の教育的な配慮とアドバイスを活かした取り組み

●ウサギのキララが病気で死ぬという出来事があった。動物の死を子どもたちにどのように向き合わせたらよいか戸惑いがあったが獣医師さんの適切な処置とアドバイスを頂き、キララの死を子どもたちにきちんと向き合せ、お別れをさせることができた。

死という事実を前にした時、改めて命には限りがあること、生きていることの重みを子どもたちと共に実感した。キララの死は朝会で全校のみんなにも伝えたり、キララへの思いを書いた手紙をパネルにして掲示したりした。しかし、月に1度しかない委員会活動ではこのような活動の時間を確保するのは困難であった。



〈さようならキララ〉



〈パネルを見る子どもたち〉

●キララの死から間もなくサクラがレントゲン検査の結果、骨にひびが入っていることが分かり10日ほど入院をすることになった。また、不正交合のため伸びている奥歯の治療もすることになった。本市には学校の飼育動物の治療費に関する予算措置があり安心して治療を受けさせることができた。また、獣医師さんが骨折や奥歯の状態を写真にとって丁寧に説明してくれたことを子どもたちに伝えると興味深く聞き、治してもらえると分かるとほっとしていた。そのことはまた、飼育ニュースとしてパネルにして全校に知らせた。



〈病状を説明してくれる獣医師さん〉

5 成果と課題

〈成果〉

飼育舎の動物飼育に改めて目を向け、飼育状況の改善や学習活動に取り入れる試みを実践した中で次のような成果を得ることができた。

- ① 愛情飼育をキーワードとした飼育活動に子どもたちちは誇りと責任を持って生き生きと取り組み、「丁寧に世話をされているウサギ」がいる飼育舎には子どもたちが喜んでやってくる。学校で動物を丁寧に飼育していることによって全校の子どもたちに「命を大切にする心」を育むことができる。
- ② 飼育活動を計画的に道徳や理科、国語、総合的な学習の時間と関連付け、飼育活動を継続することにより「命を大切にする心情」を体験的に培うことができる。
- ③ 獣医師さんの適切なアドバイスにより安心してウサギの死や病気に対してきちんと向き合わせる事ができる。

〈課題〉

教育的効果を考えると飼育舎の動物飼育を3年生の「命を大切にする心を育む」学習の一環として理科の「チョウの飼育」の発展的な学習として取り組むのが良いと考え、職員会に提案した。しかし、アレルギーの児童が年々増えているということから実現せず、モルモットの校舎内飼育（生活科）についても同様の理由で認められなかった。さらに、動物の飼育は昆虫や金魚の飼育と違って何かと大変であることから、必修でもないのに3年生の担任になつたら飼育に取り組まなければならなくなるのには賛成できないという率直な声も聞かれた。端的に言うと

- ・アレルギーなど飼育上のトラブルの対応に不安がある
- ・「学校で飼われている動物」の飼育活動は必修の学習内容ではない

ということである。これは、本校独自の問題ではない。9割の学校で動物を飼っているといわれるが、どこの学校においてもその飼育活動を効果的に教育活動に活かそうとするとき「活かせない、活かさなくてもいい」という根拠になることである。動物飼育を教育活動に活かしていくためには次の2点の実現が必要であると考える。

- (1) 「学校で飼われている動物」の教育的位置づけが明確にされること。
- (2) アレルギーへの対応など動物飼育の専門的知識をもつ獣医師の支援により、飼育上のトラブルに適切に対処できる仕組みが構築されること。

(川崎市立野川小学校 教諭)